

開催報告

令和4年度 青少年育成運動活性化研究協議会 令和4年11月11日(金) かでの2・7(札幌市)

不登校・ひきこもり支援は、心身のリソースを高めることが大切



道内各地で青少年育成運動に取り組んでいるの方々を対象に、運動の現状や課題、今後の進め方について共通理解を深め、地域における活動の活性化を図るため研究協議会を開催しました。当日は、北海道教育大学大学院准教授の齋藤暢一郎氏による基調講演のあと、3つの分科会に分かれ研究協議を行いました。

基調講演

演題 「不登校・ひきこもりの子ども達にどう寄り添うか —子ども・家庭のSOSに地域の大人ができること—」

北海道教育大学大学院准教授
NPO法人メンタルコミュニケーションリサーチ理事長 齋藤 暢一郎 氏



不登校について

◆不登校とは、どんな状態なのか

年間30日以上長期欠席者のうち、何らかの心理的、情緒的、社会的要因や背景で登校しない(したくてもできない)状態を言います。文科省の調査では、令和3年度の小中学校の不登校児童数は約24万5千人で過去最多を記録し、その数は増え続けています。

不登校の要因は、本人、家庭や学校などの社会など様々な要因が重なり合っています。

進級や転校などを機に、不登校になったり、反対に解消される場合が多く見られます。

◆思春期とネガティブ感情

喜怒哀楽のうち、何かに怒ったり、不安になる、悲しくなるなど[怒、哀]の感情を態度や言葉で表現できない状態でストレスがかかると、腹痛などの身体反応、不登校やキレる等の行動が現れることがあります。

不登校や自傷行為等がある思春期の子どもには、こうした「ネガティブ感情に気づかない」例が少なくありません。このような子どもには、「大丈夫、大丈夫」の声掛けではなく、「不安だよね」、「怖かったね」など本人が感じている否定的な感覚を共有して、ネガティブな感情の表出を促すことが大切になります。

◆自意識の発達

思春期から青年期は、自分らしさ(自己意識)を発達させる時期に当たります。多様な他者と関わる具体的な経験を通して自分らしさが形成されてきますが、この時期に不登校などになると、こうした成長や発達の機会が失われることとなります。

不登校になっても、親だけでなく、地域で他者と関わることで、発達を支え、成長を進めていくことができると考えます。

ひきこもりについて

◆ひきこもりとは、どんな状態なのか

さまざまな要因で、おおむね6ヶ月以上、家庭にとどまり続けている状態を言い、15~39歳の若年層のひきこもりは、全国で約54万人と推計されています。

引っ越しなどの物理的な環境変化では好転しないことが多く、10年20年と、ひきこもりが続く場合もあります。

◆ひきこもる若者の心理構造

“他者より秀でるものを持ち、弱いところを見られることに苦痛を感じる”、“状況がうまくいかなくても言い訳をしない”、そんな方が、周囲よりも秀でることができなくなった時、弱さが他者に顕在化した時に、「社会」を感じるものが苦痛となり、引きこもるきっかけとなることがあります。「自己強化型」と言われるひきこもりの類型の一つです。

逃げているのではなく、「身動きがとれない」状況で、支援を受け入れたくない彼等には、新しい価値観・社会観に触れることが必要になってきます。

地域での支援の可能性

◆不登校をサポートしていく際の4つの要素

支援については、図の4つを考えると良いでしょう。

葛藤は、「引きこもっているのはダメだ」と、「引きこもっているのいい」の両者が拮抗している状態です。人は知らず知らずのうちに葛藤を解消したくなるのですが、それはリソース(心のエネルギー)の下支えがあって初めてできるのです。

リソース(喜びや安心、成功、つながりや希望などいろいろ)が高いと、身体も元気になり、気持ちも前向きになります。

なので、支援では心身のリソースを高めることが大切となります。地域の中で、他者との関わりを通して、認められたり、成長を感じることもリソースの拡大を促します。

そして、大事なのがご自身や家族・支援者を取り巻く環境の安全や自らの健康です。こうした[葛藤-リソース-健康・安全]を形作るのが「生活の枠組み」です。なので、学校に行かなくなってしまう生活のルールをそれぞれの家庭で作ることも大切なのです。

◆地域が持つ支援資源としての可能性

不登校やひきこもりが増えていますが、専門家は少ないので、これからは地域で子どもや家庭をサポートすることが必要になります。

登校ができなくても、ネガティブな感情を大切にできる家庭を地域で支援していくことが子どもの成長を育みます。

地域には多様な価値観や目的を持つ人がいますし、多様な場もあります。[葛藤-リソース-健康・安全-生活の枠組み]のどの部分の支援が必要なのか、地域には、そうした支援を届けられることができる潜在的な資源がたくさんあることを理解していただきたいと思います。



分科会

分科会では、グループワークや各テーマに沿った話題の提供があり、その後、意見交換を行いました。話題提供者からは、テーマに関する現状や課題、活動内容などの説明があり、今後の活動を進める上で貴重な場となりました。

第1分科会 テーマ「コロナ禍で実践している地域活動の共有」(グループワーク)

コーディネーター：山田 智章 氏(北海道教育庁生涯学習推進局社会教育課課長補佐)

第2分科会 テーマ「地域と子どもが“つながる”活動」

話題提供者：明石穂乃香 氏(上土幌町教育委員会 地域協働専門員)

コーディネーター：松枝 良純 氏(後志教育局 社会教育主事)

第3分科会 テーマ「コロナ禍における家庭が抱える課題」

話題提供者：内平 淳一 氏(浄土真宗本願寺 覚王寺 住職)

深堀麻菜香 氏(NPO法人おてらおやつクラブ)

コーディネーター：小田島美雪 氏(石狩教育局 社会教育主事)

